

数詞「一」からなる数量詞表現について ——日本語と中国語との比較を中心に——

林 佩芬

1. はじめに

中国語では、「“一” + 助数詞(“量詞”) + 名詞」からなる数量詞表現が日本語より多く見られることは、従来より指摘されてきた。

- (1) 他是一个好学生。 (作例)
 (2) ^{??}彼は一人のよい学生です。 (作例)

(以下、“一个”のような中国語の数量詞を「“一” + 助数詞」、「一人」のような日本語の数量詞を「一 + 助数詞」とそれぞれ表記することとし、例(1)(2)のような表現を数詞「一」からなる数量詞表現と称する。)

例(1)のように、中国語では“他是好学生”に“一个”を付加することが可能であるのに対し、日本語では例(2)のように「彼はよい学生です」に「一人(の)」を付加すると不自然な文となる。先行研究では、例(1)の“一个”を「“一” + 助数詞」の「不定」を表すものとして捉え、このような「不定」を意味する表現を用いることができるのは、中国語の名詞の特徴である「複数読み」に起因すると指摘されてきた¹。例えば、奥津(1986: 76)は、「中国語では、名詞が不定・単数であれば、普通<一>を使い、複数の場合は数量詞を使わなくてもいい。つまり単数は有標、複数は無標なのである。一方、日本語では、単数・複数いずれも特定の標識はとらない。どちらかといえば、無標の名詞を単数ととりやすい」と述べている。

- (3) 上り端に喰いかけの茶碗と、塩鱒の残っている皿が置きっ放しになっており……
 (4) 板炕沿上放着喫了還沒刷的飯碗和盛着喫剩下的鹹鱒魚的碟子……

(奥津 1986 : 75、76)

奥津(1986)は、日本語の無標識の名詞(例(3)の「茶碗」と「皿」)は、単数・複数いずれの解釈も可能であるが、一般的には単数と捉えられやすいのに対し、中国語の無標識の名詞(例(4)の“饭碗”と“碟子”)は複数として捉えられる傾向にあると指摘している。しかし、中国語の場合においても、日本語の場合と同様に、一義的に単数か複数かを決定することは実際には困難であると思われる。例(4)であげた中国語の“饭碗”と“碟子”は、日本語の「茶碗」と「皿」と同様、単数読みも複数読みも可能であり、「一」+助数詞を用いなくても、無標識の名詞のまま単数として捉えることも可能である。

中国語でも日本語でも名詞が単数読みか複数読みかを決めるためには、一般常識や文脈からの推測等、何らかの数量判断の「手掛かり」が必要である。例えば、松尾芭蕉の「ふる池や蛙飛びこむ水の音」という有名な俳句に登場する蛙の数は、日本人であれば、通常、一匹として理解されるものと思われる。この俳句について玉村(1986:4)は、「多分『さび』の精神から見て、このように蛙は一匹でなければならないと解する通念が形成されてきたのであろう。」と推測している。つまり、蛙は単数・複数のいずれの解釈も可能であるが、この俳句の「さび」の精神が蛙を単数と決める鍵となっているのである。

次に、以下の中国語の例(5)²をみてみよう。

(5) 枯藤、老树、昏鸦，小桥、流水、人家，古道、西风、瘦马，夕阳西下断肠人在天涯。

[枯れた藤、古い木、黄昏時のカラス、小さな橋、流水、家、古い道、西風、痩せた馬、夕日は西へ沈み、断腸の思いを抱く人は天涯をさすらう。]

例(5)の“瘦马”と“断肠人”以外の名詞は、単数・複数の両方として解釈することができる。それに対して、“瘦马”と“断肠人”は、「一」+助数詞を用いなくても単数読みと理解するのが一般的であるが、これは、この散曲の「天涯をさすらうもの寂しい気持ち」から、複数以上とは解しにくくなっていると考えられる。

以上の日中両言語の例文から、「一+助数詞」「一」+助数詞が用いられるか否かについては、従来のように名詞の単数・複数読みだけに根拠を求めるこ

とはできず、それ以外の要因も考慮せざるを得ないといえる。そこで、本稿では、数量詞の個体化機能に焦点を当て、存在義、聞き手の注意を喚起する用法、情報の焦点との関わりといった観点から、「“一” + 助数詞」と「一 + 助数詞」の数量詞表現を比較・検討し、両者の機能の類似点及び相違点を明らかにする。

2. 個体化機能

本節では、日中両言語における数量詞の個体化機能について述べる。

中国語の数量詞の機能として、「計数機能」以外に「個体化機能」があることはよく知られている。「個体化機能」とは、指示物の数量をカウントする「計数機能」とは異なり、大河内(1985)が指摘するように、「“一” + 助数詞」を付け加えることによって、類名や総称という抽象的、非加算的な事物を、具体的、加算的な個別物に変える機能のことを意味する。そして、中国語の数量詞「“一” + 助数詞」が実際に数字を表示する必要性から用いられる以上に使用されているという事実は、「“一” + 助数詞」がヨーロッパ言語の不定冠詞にきわめて近いものであるということをも裏付けるものである。前述の“他是一个好学生。”は、まさに“一个”の「個体化機能」の典型例といえよう。これに対し、日本語の「^{??}彼は一人のよい学生です」には、「一人(の)」を付加することは許容されない。一般的に日本語において、「一人(の)」が付加されない理由としては、一般常識や文脈などから数量が明らかである(例えば、「彼」はこの世の中に唯一の存在であり、数量は「一人」に決まっている)場合には、「一 + 助数詞」の計数機能が働いていないため、「一人(の)」を付加しえないとされる。しかし、数量詞の付加は、単に数量の情報を提示するだけでなく、事物の存在と密接な関係を有している。

(6) 二日目、ひとりの中年の日本人男性が緊張した面持ちで証人台にたった。

「屋嘉勇です。国民学校の教員であります。」《毛利恒之「地獄の虹」》

(6) 第二天，一个中年日本男人带着紧张的面孔登上了证人台。

「我是屋嘉勇。是个小学教师。」 (作例)

例(2)「^{??}彼は一人のよい学生です。」のような、コピュラ構文では許容されない「一人(の)」が、例(6)のように初めて登場する人物には付加される。この場合の「一 + 助数詞」は、例(6)の中国語の数量詞“一个”と同様に、従来、ヨーロッパ言語の不定冠詞にきわめて近いものと理解され、「不定」を表す標記とみなさ

れてきた。例えば、加藤(2003)は、日本語では、「一」を用いて「冠詞的(不定冠詞)な働き」をする場合があると述べている。

(7) 京都の下鴨に一軒の寿司屋がある。 (加藤 2003 :52)

(7) 在京都的下鴨有一家寿司店。 (作例)

例(7)の「一軒」は、名詞が表す事物の数を単に示しているのではなく、不定冠詞的に働いているものである。日本語の表現と同様に、中国語の例(7)の“一家”のような表現についても不定冠詞的な用法とされている。ところが、大河内(1985 : 3)は、「…不定冠詞と<一个>との類似でつねに問題になされてきたのは不定の表示ということであった。後の名詞が不定のものだということばかり強調されてきた。…しかし、元来不定冠詞はこの不定の表示ということ以前に、というよりそのための不可欠の前提として、個体化したもの、個別のもの、つまり現実的で具体的なものを表すという大きな役割を担っているのである」と指摘している。したがって、例(6)(7)の「一+助数詞」は、計数機能としてよりも、名詞の存在を顕著な形で指し示し、聞き手の注意を引く伏線の役割を果たしていると考えられる。また、個体化機能は数量詞の重要な性質であり、数量詞の「顕著化」(古川 1997、2001)、及び「聞き手に注目させる用法」(建石 2005)は個体化機能と密接な関係を有する。(数量詞の「顕著性」と「聞き手に注目させる用法」については、続く第3、4節で論じる。)

例(6)~(7)から分かるように、「一+助数詞」と「“一”+助数詞」のいずれにおいても、計数機能とは別に個体化機能というものが日中両言語に共通して存在している。しかし、異なる構文における統語的、意味的制約などにより、日中両言語における数量詞の個体化機能に相違がみられる。次節では、存在義との関わりの観点から、そして第4、5節ではそれぞれ数量詞の聞き手に対する注意喚起用法、情報の焦点といった観点から、日中両言語の数量詞の類似点、相違点を考察する。

3. 存在義

大河内(1985)が指摘するように、数量詞が付加される名詞が「不定」を表示する前提として、名詞が指し示す事物が具象的に存在していることが必要条件とされる。大河内(1985)の主張は以下の例文で検証することができる。

(8) 这儿没有(??一家)法语学校。

[ここにはフランス語の学校はない。] (作例)

(9) ここには(??一つの)フランス語の学校はない。 (作例)

(10) 吴双向对面的男生问, 你们这儿有(??一家)学法语的学校吗?

《韦敏「谁在梦中遇见谁, 走在水面上」》

[吴双は向かいの男子学生に聞いた。このあたりにフランス語を学ぶ学校はありますか?]

例(8)(9)は事物の存在を否定する表現であり、例(10)は事物の存在が確認できないことを表す表現である。これらの例文から分かるように、事物が存在しない、或いは確認できない場合に、数量詞を付加すると不自然な表現となる。このように、数量詞の付加が事物の存在と密接に関係していることについては、日中両言語において共通しているといえる。次に、「存在」と数量詞との関係について、さらに、存在義を有する存在文と存在義を有さないコピュラ文を用いて考察し、日中両言語の相違点を指摘する。

(11) (机の上にペンがあるという状況で)

- a. ここに{一本のペン／ペン}があります。今日はこれを使ってマジックをしましょう。
- b. これは{??一本のペン／ペン}です。今日はこれを使ってマジックをしましょう。 (建石 2005 : 93)

存在義を有さないコピュラ文(11b)の場合、数量詞の付加は不自然である。例(11a)(11b)について、建石(2005)では、同じような状況・環境下で使用する事ができても、構文の違いによって、数量詞が使用されやすい場合と使用されにくい場合があると指摘されている。しかし、なぜ、コピュラ文の場合は数量詞との共起が難しいかという問題については、先行研究ではまだ十分な説明がなされていない。そこで、以下では事物の存在との関連から、この現象について考察してみる。

コピュラ文は「AはBだ」と表記され、通常、Aで指示される指示対象について、Bで表示する属性を帰すと定義される³。コピュラ文の述語であるBは、事物の属性を表わすものであり、存在義を有さない。また、例(11)は、ペンが

聞き手の目の前に提示されている状況で使用されていることから、話し手が言わなくても、聞き手は数量情報を認知することができるため、数量情報を伝達する機能は実際には働いていない。コンピュータ文における数量詞の付加に不自然さを感じられるのは、ここで使用される「一本」という数量詞が名詞の属性として捉えられにくいいためであると思われる。逆に、数量詞を名詞の属性として捉えることが可能な場合、コンピュータ文であっても数量詞を付加することが可能である。

(12) これは 100 円のペンです。今日はこれを使ってマジックをしましょう。
(作例)

(13) 这是 100 块的笔。今天就用这支笔来表演魔术。
(作例)

例(12)(13)の「100 円」「100 块」は「ペン」「笔」の属性として捉えられるのに対し、「一本」「一支」は、通常、属性として捉えられない。例(11b)を例(12)と比較すれば、日本語のコンピュータ文に、属性として捉えられない数量詞が付加されにくいことは明らかである。一方、中国語の場合は、例(13)と以下の例(14)が示すように、属性数量「100 块」も、個体数量「一支」も自然な表現である。

(14) 这是一支笔。今天就用这支笔来表演魔术。

[?これは 一本のペンです。今日はこれを使ってマジックをしましょう。]
(作例)

中国語の数量詞「一支」は、日本語の数量詞と異なり、名詞の属性を表わすものではなく、また、実際の数量情報の伝達機能を有していなくても、名詞に付加することが許容される。これは、中国語の数量詞が日本語とは異なり、名詞の属性や実際の数量情報を表わすものでなくても、個体化機能、名詞への注意を喚起する用法(第 4 節で詳述する)が働くためである。このことは、さらに以下の例文を用いて説明することができる。

(15) “你们这儿有一家叫‘法兰西’的法语学校吗？” (作例)

[このあたりに「法蘭西」というフランス語の学校はありますか？]

“叫‘法兰西’的法语学校”は、固有名詞であり唯一の存在である。例(15)においては、“法兰西”というフランス語学校が話し手の認知の中に存在し、「“一”+助数詞」の付加は、数量の情報を伝達するというよりはむしろ名詞を目立つ形にし、相手の注意を喚起するための標記であると考えられる。数量詞のこのような名詞を目立つ形にする機能については、古川(2001:265)が“显著性原則”(saliency principle)の観点から以下のように指摘している。

(16) 显著性原則:

在人的认知结构上“凸出来”的事物因为显眼(salient), 所以很容易被人们看做是“有界的个体事物”。在语法结构上这种有界事物需要用数量定语来加以修饰, 要以“显眼的形式”(即有标记的形式 **marked form**: “数量名”词组)来表达。…… 古川(2001:265)

[人間の認知構造において「突き出している」事物は顕著であるため、「有界の個体の事物」とみなされやすい。文法構造においては、このような有界の事物は数量定語を用いて修飾されなければならない、「目立つ形式」(即ち有標形式 **marked form**: 「数量名」フレーズ)で表現される。…]

以上の考察から分かるように、中国語では存在義を有しているか否かに関係なく個体化機能が顕著である場合には数量詞の付加が自然であるのに対し、日本語では、存在義を有さないコピュラ文において、数量詞が事物の属性として捉えられない場合、数量詞は付加されにくい。この考察結果から、中国語の数量詞は日本語の数量詞と比較して、より強い顕著性を有すると推測される。次節では、数量詞の生起と「聞き手に対する注意喚起」との関係について論じる。

4. 聞き手に対する注意喚起の用法

建石(2005:97)は、日本語の「一+助数詞」には聞き手に注目させる用法があるとしたうえで、「聞き手に注目させる用法の『一+助数詞+の』の特徴として、聞き手に新情報を提示する、または、談話主題を導入する手段として『一+助数詞+の』が使用されることが挙げられる」と指摘している。建石が例示する例(17)では、まず「一枚のチラシ」が提示され、その後、そのチラシの具体的な内容が説明されている。

(17) そんなある日、仕事を終えて男が帰宅すると、郵便受に一枚のチラシが入っていた。

『あなたの外出中、あなたに代わって火災、ガス漏れ、泥棒等から家を守ります。〇〇ホームセキュリティ』 (建石 2005 : 98)

例(17)では「チラシ」の出現及びその存在が注目の焦点となっている。日本語におけるこの「聞き手に対する注意喚起の用法」は、中国語の「“一” + 助数詞」の表現にも存在する。次の例(18)(19)では、“一张结婚照”と“一个谜语”が聞き手に新情報を提示し、後続する内容の説明や叙述の伏線として用いられている。

(18) 你猜怎么着，掉出来一张结婚照，新娘还是这个新娘，新郎可不是这个新郎…

《桂田「等待绿卡」》

[思いかけないことに、一枚の結婚写真が落ちてきた。新婦は確かにこの新婦であるが、新郎はこの新郎ではない…]

(19) 好几年前见过一个谜语，“岁月如梭”，打一词组。

《贺铭「深情梦美--献给我心底深藏的梦」》

[何年も前にあるなぞなぞを見たことがあった。“歳月は杼のように速い”からあるフレーズを当てる。]

また、以下の例(20)(21)のように、物語の導入部には、「ひとり(の)」“一个”が用いられ、主人公の登場を導く。

(20) 火が付いたかのような泣き声とともに、ひとりの赤ん坊が生まれた。元気な男の子だ。平凡な夫婦の、平凡な出産。ただひとつ、その男の子に手と足がないということ以外は。

《乙武洋匡「五体不満足」》

(21) 像是被火烧着，痛苦的叫喊声急促而尖利。伴着叫喊，一个婴儿呱呱坠地。一个健康的男婴。一位平凡的母亲，一次平凡的分娩，但出人意料的是这个男婴没有手，也没有脚。

((例 20)の中国語訳)⁴

このように、日中両言語ともに、「一+助数詞」「“一” + 助数詞」を用いることによって、いずれも聞き手に注意を喚起させる働きがあることが分かる。ところが、次の例(22)からは、初登場の事物かそうでない事物かによって、日本語の「一+助数詞」と中国語の「“一” + 助数詞」との用法に相違があることがみてとれる。

(22) 九发从口袋里掏出了①一张纸，投票样投到周全荣手里。周全荣展开纸条一看，原来只是②一张白纸，脸上刷地变了表情，把③白纸甩在了地上……

《何葆国「伪币之家一圩尾街故事」》

[九発はポケットの中から①一枚の紙を取り出して、投票するかのよう
周全栄の手に投げた。周全栄が紙を広げて見てみると、それはただの②白紙
だった。彼の顔の表情は一変し、その③白紙を地面に捨てた…]

例(22)の①“一张纸”とその日本語訳の①「一枚の紙」は、いずれも文章に初めて登場する「未知」「不定」の事物を指しており、この場合の“一张”と「一枚」は事物を聞き手に目立つ形で提示し、聞き手の注意を喚起するためのものである。また、③“白纸”と「白紙」は、いずれも前述した紙のことを指示している旧情報であるため、数量詞が付加されない。それに対し、②“一张白纸”「白紙」については、日本語と中国語の用法に相違が生じる。

前置された①の“一张纸”「一枚の紙」に照応されることから、②における“纸”「紙」自体は新情報ではなく、このような場合、日本語では数量詞は付加されない。しかし、ここでは、主人公が発見した紙の正体は「ただの白紙だった」という新たな情報が加えられているため、“白纸”は一種の新情報として捉えることが可能であり、中国語においては、数量詞が付加されることになる。

以上のように、中国語の場合は、事物が初めて登場するものであるか否かに関わらず、新情報が提示される場合などには、「一」+助数詞を用いて名詞への注意を喚起する。これに対し、日本語では、初登場した事物のみに「一+助数詞」を用いて聞き手の注意を喚起し、二度目以降にその事物が言及される場合には、新情報の有無に関わらず、通常、「一+助数詞」は用いられないのである。次節では、数量詞の生起と情報の焦点との関係について分析する。

5. 情報の焦点

下記の例(23)と例(23)´を比較検討し、数量詞が付加されていない場合と付加されている場合とで、情報の焦点がどのように変わるのかを示す。

(23) A: “笔呢?怎么不见了?” [「ペンは何でないの?」]

B: “我这儿有笔。就用我的吧。” [「私ペンを持ってるよ。私のを
使ったら。」] (作例)

(23) A: “笔呢? 怎么不见了?” [「ペンは何でないの?」]

B: “这儿有一支笔。是你的吗?” [「ここに一本のペンがあるよ。あなた
のですか。」] (作例)

例(23)の“笔呢?怎么不见了?”の“笔”はAのペンであるのに対し、“我这儿有笔。就用我的吧。”の“笔”はBのペンである。同じ一本のペンではないが、“我这儿有笔”の“笔”はBが所有するペンであること、また「ペン」という類レベルとして捉えられる名詞であることが推測されうるため、この場合の“笔”の情報量はやや低いものであるといえる。したがって、ここでの情報の焦点は“我这儿”にあると考えられる。一方、例(23)の“这儿有一支笔”は、指示物“笔”が抽象概念から具象概念へと転換しており、文の情報の焦点は“笔”にあると捉えられる。本来、例(23)の“一支笔”の“笔”は、例(23)と同様に類レベルの名詞として捉えられ、推測可能な情報であるため情報量がやや低いものであると思われるが、但し、ここでは、話し手の推測「もしかしたら、このペンはあなたのもの?」という一種の新情報が含まれているため、情報量の高い情報としてみなされる。このように、“这儿有一支笔”と“这儿有笔”との差異は、名詞がもたらす情報の新旧(推論可能な情報⁵も含む)や情報量の違いに見出すことができる。つまり、“这儿有一支笔”は、聞き手の注意を「この一本のペン」に集中させる。これに対し、“我这儿有笔”は、“我这儿有”[私(の)ところにあるよ]のように“笔”を省略することができることから、事物の存在及び存在する場所に聞き手の注意を集中させる表現であることが分かる。

さらに以下の例文をみてみよう。

(24) 她大叫一声，万分惊喜的从皮包里①掏出一本书来放在我手上：“②这是我的小说一”又③掏出一本笔记：“④这儿有白纸一”又⑤掏出一支笔，塞在我手心：“⑥这儿有笔一”……

[彼女は大声で叫んで、驚喜しながらかばんの中から1冊の本を取り出して私の手に置いた:「これは私の小説です——」。また1冊のノートを取り出し:「ここに白い紙があります——」。また1本のペンを取り出して、私の手に詰め込み:「ここにペンがあります——」…]

(<http://euroasia.cass.cn/Chinese/Book/Politics/Zhegedongdang/lyt1401.htm>)

2009/05/12

会話の部分では、②“这是我的小说一”、④“这儿有白纸一”、⑥“这儿有笔一”のようにいずれも数量詞を付加しない表現が用いられている。一方、叙述の部分では、①“从皮包里掏出一本书”、③“又掏出一本笔记”、⑤“又掏出一支笔”のように、全て「“一”＋助数詞」が付加される表現が用いられている。これは、実際の会話では、「小説一冊」、「ノート一冊」、「ペン一本」が全て聞き手の目の前に提示されたうえで、会話が進められていくため、数量「一」という情報を話し手が言わなくても聞き手は認知できること、また、会話の場面では、聞き手の目の前に出すという行為によって、出された事物がインパクトのある有標の(目立つ)対象物となるため、「“一”＋助数詞」を用いて対象物の存在を再度強調する必要がないためである。一方、叙述の部分では、文字を通して事物の出現を読み手に伝えるため、「“一”＋助数詞」という目立つ形で、その指示対象となる事物の出現に対し臨場感を持たせる役割を果たしている。

さらに、助数詞が有する描写的な性質というものも、数量詞(「一＋助数詞」、「“一”＋助数詞」)が付加される名詞が情報の焦点になる要因の一つと考えられる。ここでは、助数詞の描写的な性質について説明する。

助数詞が有する描写的な機能により、同じ名詞であっても異なる助数詞を用いることによって、そのものの捉え方が変わってくる。例えば、「一名の選手」と「一介の選手」のニュアンスは異なっており、後者には貶す意味合いが含まれる。また、中国語の場合は、“一位老师”、“一个老师”はいずれも「一人の先生」の意味であるが、前者の方が相手を高める、丁寧な言い方といえよう。このような中国語の助数詞に関する研究は多く見られ、例えば、大島(1987)は、次の例(25)のように、“个”がマークされることによって、名詞句の具体的な性状、属性にまで立ち入って描写せねばならないとしている。

(25) 可是，这个钱丽丽是个急性子，非要当时知道对方的心思不可，但又没法问。
(大島 1987:20)

[しかし、この銭麗麗さんはせっかちな人で、その時相手の考えをどうしてもすぐ知りたがっていたが、聞くことができなかった。]

例(25)の“个”は義務的に必要とされるわけではないが、“急性子”のような比喩性、すなわち属性を鮮明に表示する名詞は往々にして“个”と共起しやすい

傾向にある。大島(1987)は、“真是个傻瓜”(本当におバカさんだ)、“他爸爸是个酒鬼”(彼のお父さんはアル中だ)、“你真是个马大哈”(あなたは本当にだらしがない人だ)の例を挙げ、“是个____”に生起する名詞句には、より描写的な、属性を鮮明に表示する名詞がふさわしいと主張している。助数詞のこのような描写的な性質も、それと修飾関係を有する事物が文の情報の焦点になりやすいことと関係していると思われる。さらに、助数詞の描写的性質は、形容詞と共起することからも見てとることができる。

(26) 他给了我一小撮头发。[彼は私に一つまみの髪の毛をくれた。] (作例)

例(26)の助数詞“撮”が形容詞“小”と共起し、「指でつまむ」「ひとつまみ」「ごく少量」のイメージで名詞「髪の毛」を修飾し、名詞を顕著な形にする。助数詞が形容詞と共起し名詞を修飾することが可能であるのは、助数詞が描写的な性質を有するためである。助数詞の持つこの描写的な性質は、それと修飾関係にある名詞が指示する事物をより描写的性質が強いものに換えるため、これも数量詞が付加される名詞が情報の焦点になりやすい理由の一つと考えられる。

6. 結語

以上、「一+助数詞」と「“一”+助数詞」の数量詞表現について比較・検討した結果、いずれにおいても、計数機能とは異なる個体化機能というものが存在することが分かった。また、事物が存在しない、或いは確認できない場合には数量詞の付加が不自然であることから、数量詞の付加が事物の存在と密接な関係があるという点については、日中両言語において共通していることが明らかになった。但し、異なる構文における統語的、意味的制約などにより、日中両言語における数量詞の個体化機能には相違がみられ、中国語表現と比較して、日本語の数量詞表現には使用制限が多いといえる。例えば、中国語では存在義を有しているか否かに関係なく数量詞の付加が自然である場合が多いのに対し、日本語では、存在義を有さないコピュラ文または数量詞が事物の属性として捉えられない場合、数量詞の付加は許容度が低い。また、中国語では、初めて登場したものであるか否かに関わらず、新情報のような注意を引き起こす要素が名詞に付加されている場合は、「“一”+助数詞」が用いられる。これに対し、日本語では、初めて登場した事物のみに「一+助数詞」を用いて聞き手の注意を

喚起し、二度目以降にその事物が言及される場合には、通常、「一+助数詞」の形は用いられない。このように、数詞「一」からなる日中両言語の数量詞表現には相違点が存在するものの、両者に共通する数量詞の個体化機能は、事物の存在、聞き手に対する注意喚起、情報の焦点と密接な関係にあることが明らかになった。

注

- 1 奥津(1986)、中川・李(1992)などを参照。
- 2 元朝马致远《天净沙 秋思》の散曲である。例(5)の意味を詳しく述べると以下のようになる。
「枯藤缠绕着老树，树枝上栖息着黄昏时归巢的乌鸦，一座小桥下，流水潺潺，旁边有几户人家，在古老荒凉的道路，秋风萧瑟，一匹疲惫的瘦马驮着我蹒跚前行。夕阳向西缓缓落下，悲伤断肠的人还漂泊在天涯。」[枯れた藤が古い木に巻き付いており、黄昏時に巣に帰ったカラスが木の枝の上にとまっている。小さな橋の下では音をたてて水が流れ、そばには家が何軒かある。古くて荒涼とした道には、秋風が物寂しく吹き、疲れ切った一頭の痩せ馬は、私を乗せてふらつきながらゆっくりと前に進む。夕日は西へゆっくりと沈み、悲しく断腸の思いをする人はまだ天涯を彷徨う。]
- 3 この定義は、西山(2003:123)のコピュラ文の中の措定文(predicational sentence)の定義に従うものである。
- 4 本文の中国語訳は、北京日本学研究中心の「中日対訳コーパス」によるものである。
- 5 ここでの「推論可能な情報」とは推論可能性(accessible)の概念を用いる Chafe(1994)のアクセス可能情報のことである。Chafe(1994)では、アクセス可能情報は、最初聞き手の意識の周辺に存在し、半活性(semiactive)状態として捉えるものであるが、話し手の発言によって、活性状態に移行する情報のことであると指摘されている。そのため、情報の伝達時間は旧情報より長く、新情報より短い。また、認知的負担は旧情報より高く、新情報より低い。

引用文献

- 奥津敬一郎(1986)「日中対照数量表現」『日本語学』5巻8号 pp.70-78 明治書院
 大島吉郎(1987)「‘是个 NP’について」『中国語研究』27号 pp.18-25 白帝社
 加藤美紀(2003)「もののかずをあらわす数詞の用法について」『日本語科学』13号 pp.33-57 国書刊行会
 建石始(2005)「日本語の限定詞の機能—名詞の指示の観点から—」博士学位論文 神戸市外国語大学大学院外国語学研究科
 玉村文郎(1986)「数詞・助数詞をめぐって」『日本語学』5巻8号 pp.4-14 明治書院

- 中川正之・李浚哲(1992)「日中両国語における数量表現」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』pp.95-116 くろしお出版
- 西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味と語用論』ひつじ書房
- 古川裕(1997)「数量詞限定名詞句の認知文法—指示物の<顕著性>と名詞句の<有標性>—」『大河内康憲教授退官記念 中国語学論文集』pp.237-266 東方書店
- 古川裕(2001)「<外界事物的“显著性”与句中名词的“有标性”—“出现、存在、消失”与“有界、无界”>」《当代语言学》第3卷第4期 pp.264-274 外语教学与研究出版社
- Chafe, Wallace L.(1994)*Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*, The University of Chicago Press.